埋蔵文化財発掘調査ニュース No.10

銘苅直禄原遺跡・銘苅原南遺跡

2000年3月

那覇市教育委員会

発行／那覇市教育委員会　〒900-8553　沖縄県那覇市樋川2-8-8
編集／那覇市教育委員会文化財課　TEL（098）853-5776
印刷／文 進 印 刷 株 式 会 社

銘苅直禄原遺跡・銘苅原南遺跡発掘調査ニュース

（１）はじめに

今回紹介する二つの遺跡は、那覇新都心地区に所在します。同地区は、沖縄県那覇市の北西部に位置する約２１４ヘクタールもの広大な地域です（第１図）。この地域は先の大戦後、米軍によって接収されました。その後１９８７年に返還され、一般に天久解放地と称された地域です。

返還された当時は、標高４０～５０ｍの丘陵や、河川沿いに発達した崖地などが残る起伏に富んだ地形が見られました。

那覇市教育委員会（以下、市教委）では、地域振興整備公団（以下、公団）による整備事業がスタートする前に、文化財の有無を確認する調査を行っています。その結果、９遺跡の存在が判明し、平成２年７月から本格的な発掘調査が開始されることになりました。

さて、銘苅直禄原遺跡・銘苅原南遺跡は、整備事業がスタートした後、新たに発見された遺跡です。さらに、両遺跡の主要部は那覇市公園緑地課（以下、市公園）による「天久公園整備地域」に位置することが判明しました。両整備地域は事業主体が異なるため、発掘調査も遺跡を二分した形で行われています。

今回紹介する調査概要は、平成１０年度に行われた新都心整備地域内に広がる遺跡の縁辺部を対象にしています。

（２）銘苅直禄原遺跡の概要

本遺跡は那覇市銘苅（小字、直禄原）に所在します。標高約１２㍍の湿地帯に位置する遺跡で、その東側および南側には河川（多和田川・銘苅川、大湾川）が流れ、北西側には標高約２２㍍の台地があります。本遺跡の周辺には、北西部に安謝前東原遺跡、河川を挟んだ対岸部に銘苅原遺跡・銘苅原南遺跡など、同時期の遺跡が確認されています。また、北側にスグルクガーと呼ばれる井泉があり、現在でも拝所として信仰の対象となっているようです（第２図）。

さて、今回の調査は平成１０年１１月～平成１１年３月までの期間で実施されました。その結果、遺跡の層序は、大きく分けて５層確認されました。Ⅰ層から白磁・青磁などの中国産磁器や土器、Ⅱ層およびⅢ層上面から土器や木製品・獣骨などが出土しています。Ⅳ層は木片のみが堆積する層序です。Ⅴ層が最下層の地山で、クチャと呼ばれる粘土層でした。遺構としては、Ⅲ層において「集石遺構」や「掘込み遺構」が確認されましたが、その性格や時期については判然としません。本遺跡の主体となる時期は、中国産磁器など、出土遺物の状況からみると１４～１５世紀頃（グスク時代）と考えられます。

ところで、今回の調査において特に注目されたことは、木製品が多数出土したことです。通常、木製品などの有機物は空気に触れることにより酸化・腐食するため、発掘調査で出土することは希です。しかし、今回の調査は湿地帯に位置する遺跡であったことで、資料が水中に「パック」保存されていました。その結果、極めて良好な状態で出土したものと考えられます。

県内において、この時期の木製品の出土例は少なく、今回のような事例は初めてのことと考えます。しかし、今回出土した木製品は用途不明品も多く、今後、遺跡の主体部とあわせ、詳細な調査研究が待たれるところです。

（３）銘苅原南遺跡の概要

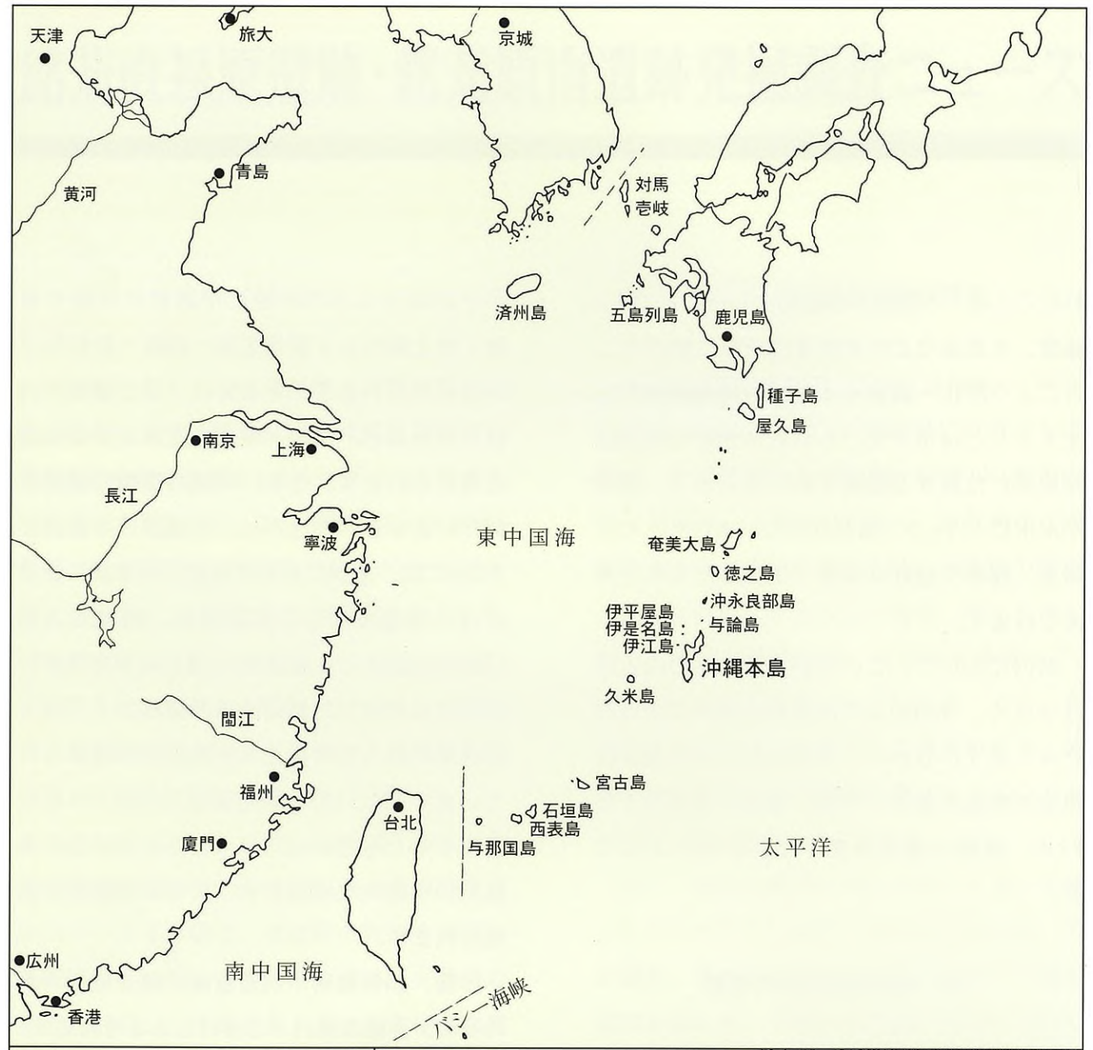
本遺跡は那覇市銘苅（小字、銘苅原）に所在し、銘苅川の東側に広がる遺跡です。遺跡の主体部分は、平成９年度に市公園の依頼で発掘調査が行われています。今回の調査は、遺跡の主体となる部分より若干東側に広がる範囲が平成１１年１月から３月までの期間で実施されました。

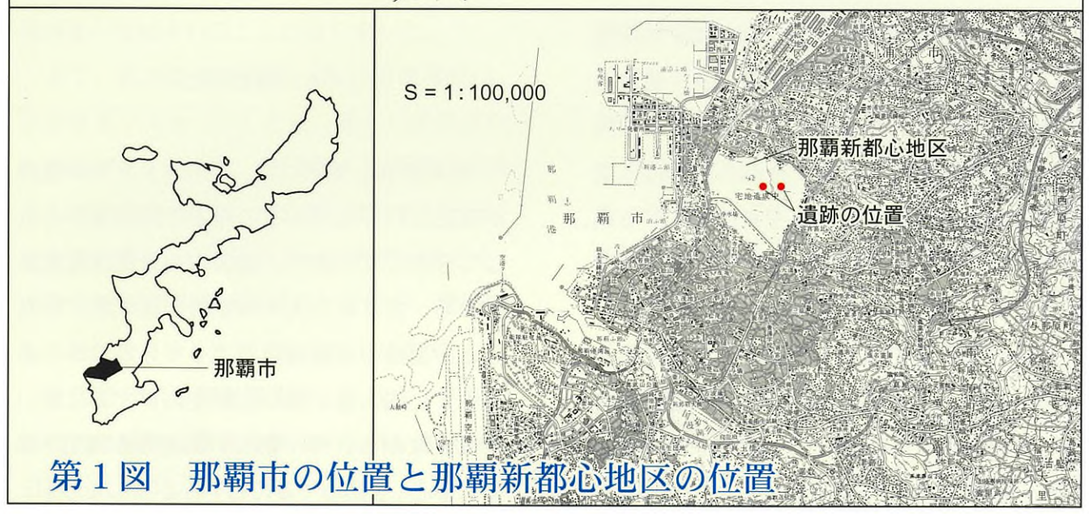
その結果、層序は大きく分けて３層確認されています。Ⅰ層は表土層、Ⅱ層が遺物包含層、Ⅲ層は青灰色粘土（クチャ）の二次堆積層です。出土した遺物は在地土器（グスク土器）がそのほとんどで、他に中国産の白磁や青磁・徳之島カムィ窯須恵器・銭貨・鉄釘などが得られています。本遺跡は、出土遺物の内容からみると、グスク時代を主体とするものと考えられます。なお、明確な遺構は確認されていません。ちなみに、本遺跡の半径約２００ｍには、北側に銘苅原遺跡、南東側にヒヤジョー毛遺跡などの集落遺跡、南側に古墓（銘苅古墓群）や生産遺跡（名護松尾原南遺跡）、西側には前述した銘苅直禄原遺跡など、ほぼ同時期の様々な性格をもった遺跡が確認されています（第２図）。周辺遺跡との関わりから推察すると本遺跡は川のほとりに占地し、集落間の中継的な役割をもっていた可能性が示唆されます。

今後、類似遺跡や周辺遺跡の調査成果とあわせて、詳細な検討が必要になると考えます。

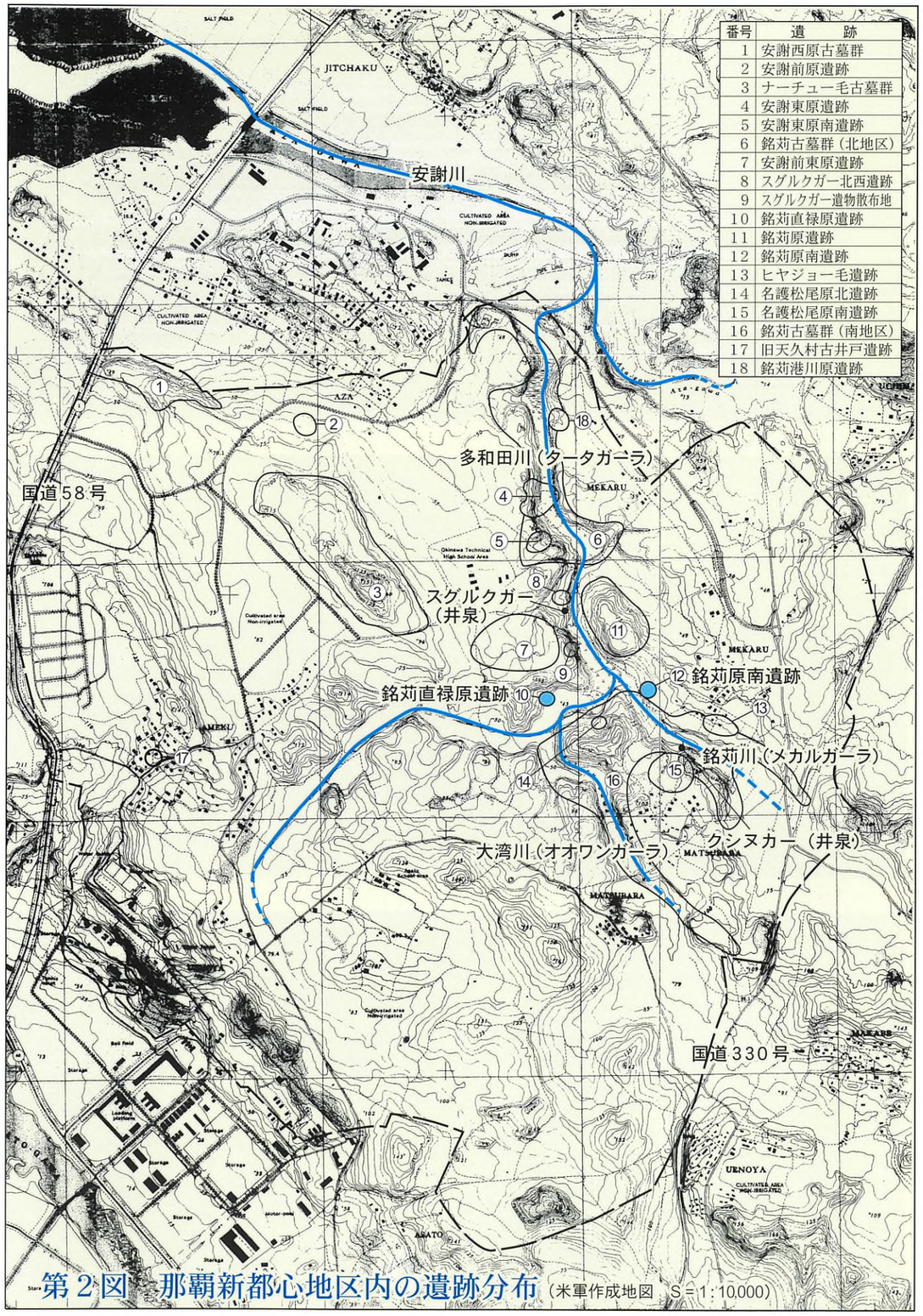
（４）おわりに

那覇新都心地区には、現在１８ヶ所の遺跡が確認されており、その殆どは河川を中心として分布しています。地区内の景観は変化しつつも、古くから人々の生活が営まれてきたことが遺跡の発掘調査によって分かりつつあります。先人達が築いた歴史のロマンに想いをはせながら、今、新しい街造りが進む「那覇新都心」を眺めてみてはいかがでしょうか。





第１図　那覇市の位置と那覇新都心地区の位置



番号	遺　跡
1	安謝西原古墓群
2	安謝前原遺跡
3	ナーチュー毛古墓群
4	安謝東原遺跡
5	安謝東原南遺跡
6	銘苅古墓群（北地区）
7	安謝前東原遺跡
8	スグルクガー北西遺跡
9	スグルクガー遺物散布地
10	銘苅直禄原遺跡
11	銘苅原遺跡
12	銘苅原南遺跡
13	ヒヤジョー毛遺跡
14	名護松尾原北遺跡
15	名護松尾原南遺跡
16	銘苅古墓群（南地区）
17	旧天久村古井戸遺跡
18	銘苅港川原遺跡

第２図　那覇新都心地区内の遺跡分布（米軍作成地図　S＝1：10,000）

銘苅直禄原遺跡

発掘調査の作業状況
（西より）
湿地帯のため常に水が湧いており、晴れた日でも泥だらけになりながらの作業が続く。

層序の堆積状況
（東より）
緑色の粘土層（Ⅲ層）が落ち込んで堆積しており、これが掘込みの痕跡と考えられる。壁にみえる茶色い部分は木。

実測作業の状況
（北より）
ポイントに竹串を刺して実測を行う。足下には水が湧いている。

遺構の検出状況
（南より）
集石遺構が遺跡の北側で確認された。人頭大の石が１ヵ所に集中している。

遺物の出土状況
（南東より）
獣骨（牛？）の下顎骨。本遺跡ではこのような獣骨が他にも多く出土している。

遺物の出土状況
（南東より）
出土した木製品のひとつ。墨壺（？）と考えられる。

銘苅原南遺跡

発掘調査の開始
（南西から）
湧いてくる水や泥を取り除きながらの発掘調査。

遺跡の全景
（南から）
銘苅川のすぐ側に遺跡が広がる。（左側の雑草地が銘苅川）

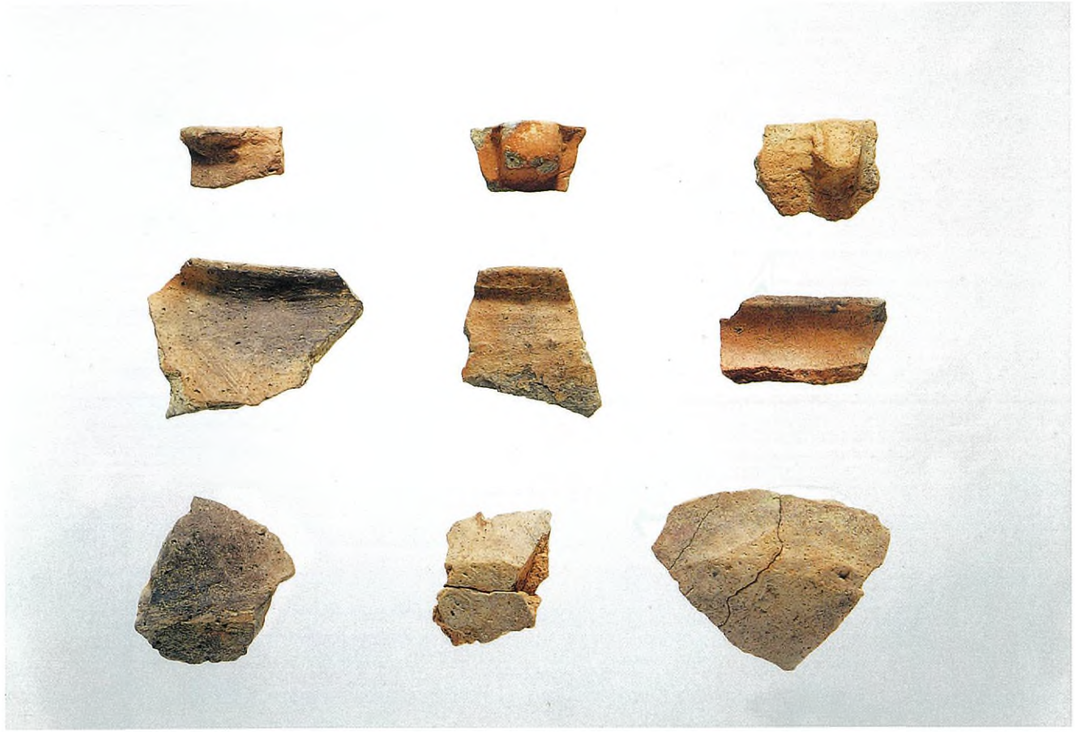
発掘調査の作業状況
（西から）
遺跡西側の遺物包含層（Ⅱ層）を掘り下げる。

遺物の出土状況
（北から）
遺跡西側のⅡ層から、土器がまとまって出土した。

遺跡の基本層序
（北西から）
Ⅰ層（表土）はすでに掘り下げられており、Ⅱ層、Ⅲ層が確認できる。

実測作業の状況
（北から）
遺跡の範囲や発掘調査状況を平板実測する。

銘苅直禄原遺跡出土遺物　上：左側は獣骨（牛？）、上が下顎骨、下が四肢骨。右側は木製品、上は杭状製品、下は左側が墨壺（？）、右側は漆塗製品で黒色と朱色が塗り分けられている。
下：上段は土器、下段は中国産の白磁と青磁。



銘苅原南遺跡出土遺物　上：上・中段は土器の口縁部、下段は底部。
下：上段は銭貨・鉄釘。中段は徳之島カムィ窯須恵器と産地不明須恵器（右端）。
下段は青磁と白磁。